

令和 8 年度業務運営懇談会議事要旨

1 日 時：令和 8 年 6 月 4 日（木）13：30～16：00

2 場 所：独立行政法人農林水産消費安全技術センター本部 7 階大会議室
（さいたま市中央区新都心 2－1 さいたま新都心合同庁舎検査棟）

3 出席者

◎座長

木内 岳志 独立行政法人農林水産消費安全技術センター 理事長

○外部有識者

川上 和久 麗澤大学 教授（Web 参加）

立石 亮 日本大学 生物資源科学部 アグリサイエンス学科 教授

松井 徹 京都大学 名誉教授（Web 参加）

森田 満樹 一般社団法人 Food Communication Compass 代表

森光 康次郎 お茶の水女子大学 生活科学部 食物栄養学科 教授

與語 靖洋 公益財団法人 日本植物調節剤研究協会 研究所 技術顧問

（五十音順 敬称略）

○説明者等

牟田 大祐 理事

橋本 陽子 理事

池田 淳一 理事

飯村 正紀 監事

須永 善行 情報システム・セキュリティ統括官

小塚 大生 有害物質等分析調査統括チーム長

田熊 秀行 企画調整部長

本澤 勝 総務部長

伊藤 亜希子 規格調査部長

松田 雄一 認定センター所長

秋山 憲孝 表示監視部長

古川 明 肥飼料安全検査部長

入江 真理 農薬検査部長

4 議事次第

(1) 開会（理事長挨拶、出席者紹介）

(2) 議事

- ・令和7年度業務運営懇談会委員からのご意見への対応状況
- ・令和7年度プロセス評価対象の取組紹介と業務実績自己評価の概要
- ・その他

(3) 全体を通した委員との意見交換

(4) 閉会

5 質疑応答

(1) 令和7年度業務運営懇談会委員からのご意見への対応状況

外部有識者	YouTube 動画「10分でわかる FAMIC」は、過去に制作された3分間の動画より FAMIC の業務内容がよく伝わると思う。
-------	---

(2) 令和7年度プロセス評価対象の取組紹介と業務実績自己評価の概要

① 肥飼料関係業務

外部有識者	<資料 2-2 No.2 肥料技能試験の主催開催に向けた体制整備について> 技能試験の主催は大変なこともあり、職員の負担が心配であったが、配慮されているということで安心した。試験参加者の分析精度向上に繋がり、自己収入の増加に貢献していると言える。 技能試験は筆記試験で実施するのか、実技で実施するのか。 試験を実施した結果、スコアによっては不合格ということもあるのか。
-------	--

説明者	FAMIC から試験参加者にサンプルを送付し、分析を実施していただく。 FAMIC が分析値を取りまとめて集計し、分析値が母集団からどれくらい離れているかを試験参加者に文書でお知らせする。 不合格というのはないが、分析値が母集団から大きく離れていた試験参加者は講習に参加できるようにする。講習は FAMIC に来ていただく形式のほか、要望があれば FAMIC の職員を講師として派遣して行うことも考えており、試験参加者からのニーズに応じたフォローアップを行う予定。
-----	---

外部有識者	<資料 2-2 No.3 汚泥肥料等中の PFAS の分析法開発について> 今回の PFAS の分析法は、汚泥肥料を今後活用していく流れで開発したものか。 この分析法は汚泥肥料だけでなく肥料全般に使えるのか。
-------	---

説明者	国内資源の有効活用の1つとして汚泥の利用があるが、汚泥には重金属等が含まれており品質管理が重要。PFAS についても管理の必要性が指摘されているところ。 汚泥肥料と一般的に使われてきた化成肥料は性状が異なるため、今回の PFAS の分析法は汚泥肥料に限るものである。他の種類の肥料についても、
-----	--

	情報収集に努め、安全性の観点から PFAS を分析する必要があるであれば対応したい。
外部有識者	飼料の分析では一部にサロゲートを用いていたが、肥料では不要と考えているのか。食品や飼料の分析ではサロゲートを用いることが多いが、肥料では不要ということであればそれでよいと思う。
説明者	確認する。 (＊会議後、PFAS, PFOA, PFHxS 及び PFNA の同位体標識を使用し補正していることを確認し、外部有識者に連絡)
外部有識者	<資料 2-2 No.4 資源配分転換による業務体制の強化(肥料)について> 分析機器を集約化することだが、集約した場所で災害が起こった際の対応はどうするのか。 他部門と機器を共有した結果、濃度の違い等、分析する対象によっては使用順によるコンタミが発生するのではないか。
説明者	ご指摘の通り、試験室の集約により、有事により集約先のセンターが機能不全となった時の対応の検討が重要であることから、業務の合理化と併せて、各地域センターで役割分担を確認している。分析の中心的な拠点であるさいたま本部が機能不全となった場合、肥料の分析は名古屋センター、飼料の分析は神戸センターが中心となり分析を行うこととしている。また、他部門と機器を共有することで、分析精度が落ちるのは本末転倒なので、集約にあたっては、測定試料による影響も加味して検討を行ってきた。引き続き、分析内容を充分加味して集約を検討したい。
外部有識者	情報交換が活発になるということは、情報漏えいのリスクも増加するということである。また、やりとりした外部の者からの情報漏洩にも注意が必要である。
説明者	肥料技能試験の主催開催により、従来に比べ外部とのやりとりの増加が見込まれることから、充分に気をつけて業務に当たりたい。
外部有識者	分析機器の集約・共有は避けられないと思う。分析機器の高度化に伴い、機器は高額に、その部品も高価になっている。他部門と共有できるところは共有化した方がよいが、各部門が使用する時間を把握し、スケジュール管理を上手く行う必要がある。
説明者	高額分析機器の集約の検討にあたっては、機器の使用時間を考慮しつつ行ってきた。引き続き、使用状況を基に検討を進めたい。

外部有識者	<資料 2-2 No. 8 飼料中の PFAS の分析法開発について> 稲わらに含まれる PFAS の分析法の公定法化が 1 年で終了したことは特殊な事例。担当した職員の負担も大きかったと思われるが、短期間で終了したことは素晴らしいことである。
② 農薬関係業務	
外部有識者	<資料 2-2 No. 5 農薬の再評価に係る審査業務について> 消費者から見ると、農薬の再評価がなかなか進んでいないように見える。今のペースでは再評価が終了するのにか心配である。日本はリスクアセッサーが足りないと国際的に言われているので、FAMIC が下支えをしてくれていることは心強い。
外部有識者	再評価に AI を活用するという話があったが、学術的なデータについては AI の精度はまだ不十分である。
説明者	農林水産省もその認識で AI をスクリーニングに使用しており、最後は職員によって確認している。
外部有識者	<資料 2-2 No. 6 農薬行政の国際調和のための海外実地研修について> Codex の部会である CCMAS において、現在は FAMIC 仙台センターの所長が毎年参加して発言している。同様に FAMIC 職員が国際会議に参加して積極的に発言してほしい。
外部有識者	<資料 2-2 No. 7 農薬残留調査体制の構築について> RNAi 農薬、ペプチド農薬など新しい農薬が出てきている。農研機構の農薬部門が大幅に縮小している。両組織間で協力して欲しい。
説明者	今後、稲の節水型乾田直播栽培での農薬散布など、新しい技術による農薬使用での残留農薬調査に取り組む計画である。 農研機構には FAMIC からの出向者がいるので、FAMIC としても連携していきたい。
③ 表示関係業務	
外部有識者	<資料 2-2 No. 10 食品表示疑義に係る立入検査等業務について> 産地が違ったとのことだが、DNA 分析でスルメイカかアルゼンチンマツイカか判別したのか。イカで判別するのは種の違いだけか。
説明者	アルゼンチンマツイカは南米に生息し日本周辺には生息していないため、種の違いで国産かどうかを判別している。
外部有識者	遺伝子検査に特殊な PCR を行っているのか。

	最初から、複数の商品サンプルを PCR にかけた方が効率的だと思うが、ひとつひとつ根拠を積み上げる必要があることが分かった。
説明者	イカの DNA をとってきて PCR で増幅し、最終的には配列をシーケンスで見ている。イカの場合、まず電気泳動でバンドを見ており、配列まで見ると高い確度で判別できる。
外部有識者	ナノポアシーケンスを利用すればかなり簡易的に判別することができる。遺伝子関係の検査に導入可能か調べてみてはどうか。
外部有識者	＜資料 2-2 No. 11 地方公共団体からの科学的検査依頼について＞ 有償化は良いと思う。地方公共団体は食品表示基準に追いつくのが精一杯である。イカの事例のように、分析と検査の両方のノウハウをもつ専門家として地方公共団体を助けてほしい。
説明者	地方公共団体に対し、FAMIC がどのようなことをサポートできるのか PR していきたい。
④ JAS 関係業務	
外部有識者	＜資料 2-2 No. 12 JAS 基準を満たさない疑義のある集成材の緊急調査＞ JAS 基準を満たさないことは、輸出する側が発行した証明書を輸入する側がチェックした際に判明したのか。
説明者	国内の業界団体が任意で行っている検査で判明した。
外部有識者	＜資料 2-2 No. 13 K 値試験方法の国際規格の開発について＞ 魚の活〆、K 値に関する話題がテレビでも取り上げられていた。海外との交渉は大変だと思われるが頑張ってください。
説明者	お褒めの言葉を頂戴し感謝申し上げます。関係機関と連携して引き続き対応していきたい。
外部有識者	＜資料 2-2 No. 14 監査会社の定期審査の業務委託について＞ 今後 JFS-C はやっていくのか。確認するところ、ノウハウは全然違うので、経験豊かな人を育ててほしい。
説明者	将来的には JFS-C もという話はあるが、現在国内では JAB（日本適合性認定協会）が担当している。FAMIC は今 A、B を担当している。
外部有識者	＜資料 2-2 No. 16 専門家派遣等による分析能力向上の支援について＞ ベトナムにおいて分析関係機器のメンテナンスはできているのか。

説明者	環境が厳しく、日本ほどはできていないのではないかと思います。
⑤ その他の業務	
外部有識者	<資料 2-2 No. 17 業務運営コストの縮減について> 分析機器を減らすことが必ずしも良いわけではないが、機器の更新契約ができないのは困る。集約はなかなか難しいが頑張してほしい。
外部有識者	<資料 2-2 No. 18 人材確保について> 学生が FAMIC で自分のキャリアを描けるかわかるよう、魅力的な動画を作成してほしい。 中途採用においても、女性職員が子育てをしやすいことは大きなアピールポイントである。
説明者	学生に見てもらえるような面白い動画を作成してアピールしていきたい。FAMIC ではワークライフバランスや育児休暇は比較的取れているので、そういった点をアピールしたい。
外部有識者	今の学生は民間企業への就職を希望する傾向がある。国家公務員には採用試験があり、採用を先延ばしにする制度がないことがネックになっていて、このままでは受験者が減少するのではないか。
説明者	修士 1 年目で国家公務員採用試験を受けても有効であるが、受ける人が少ないのが現状である。畜産系技術職員、水産系技術職員の試験は受験した年のみ有効。採用スケジュールは民間企業より遅れているので、リクルート活動は早めに行うようにしたい。
外部有識者	学生は、国家公務員は事務官のみというイメージを持っている。FAMIC に分析業務があることが分かれば、興味を持つ学生がいるのではないか。
(3) 全体を通した委員との意見交換	
外部有識者	地方自治体でも生成 AI を活用して業務量を削減しているところがある。活用事例を集めて、業務を削減できるところは削減してほしい。
説明者	情報漏えいのリスクを考えると、機密情報をインプットできないというのが大きなデメリットである。内部だけで使える AI を検討しているが、直ちに使える状況ではない。
(4) 閉会	
理事長	国際会議で発言できる人材育成、知見の維持・継承、自治体のサポート、職員の負担への配慮、情報漏えい対策など、様々なご意見をいただいた。

いただいたご意見をふまえて業務に取り組みたい。